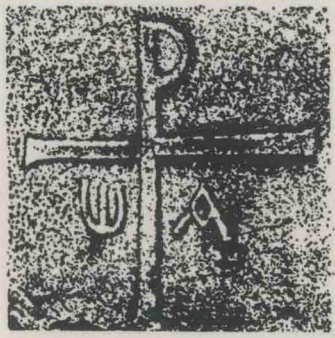
オリゲネス　小高 毅 訳

祈りについて・殉教の勧め

キリスト教古典叢書 1/2



上智大学神学部編
P. ネメシェギ責任編集

創文社刊

祈りについて・殉教の勧め

オリゲネス
小高　毅訳

上智大学神学部編
P.ネメシェギ責任編集
創　文　社　刊

小高毅（おだか・たけし）
1942年生まれ。
1976年聖アントニオ神学院（哲学・神学）卒。
1978—1980年 Augustinianum. Institutum Patristicum (Roma) に学ぶ。
1984年上智大学神学部神学博士。
〔訳書〕 オリゲネス『諸原理について』『雅歌注解・講話』『ヨハネによる福音注解』『ヘラクレイデスとの対話』『ローマの信徒への手紙注解』『聖霊論』（以上創文社），リェバク『カトリシズム』（エンデルレ書店）
〔著書〕『オリゲネス』『古代キリスト教思想家の世界』（以上創文社）

祈りについて・殉教の勧め〔キリスト教古典叢書12〕

1985年10月20日　第1刷発行　　ISBN4-423-39212-7
1993年5月30日　第2刷発行

編集者　上智大学神学部
編集責任者　P・ネメシェギ
訳者　小高毅
発行者　久保井浩俊

定価3090円（本体3000円）

発行所　株式会社　創文社
本社　〒102 東京都千代田区一番町 17—3
仮事務所　〒112 東京都文京区関口 1—44—7
電話 03—3235—4361
Printed in Japan

著作権者との申し合せにより検印省略　暁印刷・鈴木製本

序　言

祈りと殉教―、現代の日本人の大部分にとってこの二つのことは、自分の生活体験とあまり関係のないことと思われるかもしれない。しかしこのことは、たとえ事実であっても、決して好ましい事実とは言いがたい。

まず祈りについて言うと、祈りを忘れた人間は、鳴くことを忘れたうぐいすのようなものと言えるのではなかろうか。すべての生き物の中で人間だけが、時間と空間によって制限された物質的な宇宙万物を思想によって超越し、真・善・美の世界、さらにその根拠である究極的なもの（神）の世界に触れることができる。自分のこの能力を使わず、真・善・美に対して興味を示さず、ただ利益や有益性の世界にのみ閉じこもる人は、自分の人間性をみじめなものにするとともに、社会をも堕落させてしまうものである。

しかも、真・善・美のことを考えていても、もしこれらの価値の絶対性を裏づける究極的なもの（神）について考えようとしないならば、その人にとって真・善・美の世界は、きわめてぐらつきやすいものにならざるをえない。したがって、神のことを真剣に考えることは、各個人のためにも、また社会のしあわせのためにも必要なことであると思われる。

ところで、神について考えるということは、人間にとり、神との最高の接し方ではない。というのは、神について考える人間は、無限の神を自分の有限な概念やことばのレベルに格下げしてしまうからである。これとは異なり、神に向かって祈るときには、人間は、有りのままの神に対して心を開くのである。その人はもはや、神を

人間のことばで説明しようとはせず、有りのままの神、名状しがたい神に呼びかけるのである。

もちろん祈りのうちにも、神をただ自分の利益の手段として利用しようとするような祈りがある。おそらくこのような祈り方にうんざりしたからこそ、深い宗教心を持つある人々は、祈りを高く評価しないのであろう。しかし真の祈りは、決してそのような自己中心的な企てではない。真の祈りは、究極的なものである神に自分をことごとく従わせる人間の全面的な帰依なのである。

オリゲネスの教える祈りは、このようなものである。それは、厳し過ぎると言えるほどに現世的利益の追求を排除した、全く純粋なものである。千七百年前の書物から今日のわれわれの耳に達する彼の熱心な勧めが、鳴くことを忘れたうぐいすである現代人に、再び真の祈りを発見させることができたなら、何というすばらしいことであろうか。

殉教についても同様のことが言える。もちろん現在の日本では信教の自由が認められており、徳川時代の恐るべきキリシタン弾圧は、喜ばしいことに、すでに過去のこととなった。さらに、排他的な愛国心のために若者たちのいのちが犠牲にされるという時代がもはや過ぎ去ったということも、歓迎すべきことである。しかし現代社会においてすべての理想が疑わしいものと思われるようになり、人々が何かにいのちをかけることが少なくなったということは、決して好ましい現象ではない。人間はおよそ、そのために死んでもよいという何か、あるいは誰かを持っているときにこそ、生きがいを感じ、喜んで生きることができるのである。オリゲネスにはそのようなものがあった。彼は神のために、キリストのために死ぬことを決していとわなかった。だからこそ彼は、力強く生きることができたのである。祈りについての考えと同様に、殉教についての彼の考えも、厳し過ぎるほど純粋であるが、そこからも、すべてを相対化してしまった現代人は、多くのことを学ぶことができると思う。

こうした理由で、古代から現代に至るまで愛読され続けてきた、オリゲネスの『祈りについて』と『殉教の勧

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

め』という書物が、小高毅師の優れた翻訳のおかげで、今日本人にも読めるようになったことは、キリスト者にとってきわめて喜ばしいことであると言わざるをえない。多くの読者がこれらの書から感銘を受けることを祈って止まない。

一九八五年六月十日

上智大学教授　ペトロ・ネメシェギ

目次

序　言……P・ネメシェギ…i
緒　言……三
オリゲネスにおける「祈り」と「殉教」……一九
教父時代における「主の祈り」……三三
『祈りについて』……四五
『殉教の勧め』……一五九
引用箇所の注……二〇九
解説の注……二三一
文　献……二五〇

祈りについて・殉教の勧め

緒　言

ここに訳出した『祈りについて』と『殉教の勧め』の二編は、オリゲネスの厖大な著作の中でも、「珠玉の小品」と呼ばれるものである。この二編は、既に故有賀鉄太郎が『オリゲネス研究』で詳細に解説し論じており、日本でも、つとに知られているものである。これらの二編は、E・ド・ファイ(de Faye)の指摘するように、「臨機の書」ともいうべきものであるが[1]、有賀の指摘するように、「宗教的現実に対するかれの実践的態度」を「明瞭な輪郭を以って現わ」しており、オリゲネスの「キリスト者的人格を知るためには甚だ重要な資料となるものである[2]」。

ところで、B・F・ウエスコット(Westcott)は、この二編を評して、「オリゲネスの著作中、これほど欠点のないものはなく、これほど美しい思想に満ちているものはない[3]」と述べているが、「これほど美しい思想に満ちているものはない」ことは事実であるが、ここで述べられているオリゲネスの教説も、アレクサンドリアのテオフィロス、ユスティニアヌスによって異端宣告の理由としてあげられている[4]のであるから、「これほど欠点のないものはない」とは言えないのである。それにもかかわらず、全文がギリシア語原文で保存されたことは、まさに僥倖と言うべきであろう。バシレイオスとナジアンゾスのグレゴリオスの二人の手になる、オリゲネスの詞華集『フィロカリア』には、この二編からの引用は一つもなく、(しかし、これはこの二編が異端に満ちているから無視されたということではなく、二人の関心が、聖書釈義・護教論・自由意志というテーマで詞華集を編纂することにあったためであろう)、また、ルフィヌスとヒエロニムスという二人のオリゲネスのラテン語翻訳者がラテン語訳を試みていないことは奇とせねばならない。しかし、この二編が古代から重視され、愛好されてき

たことは、ギリシア語原文で保存されたことにうかがえる。これは古代に限るものではなく、現代でも同じである。オリゲネスの著作の中で、この二編ほど現代語に翻訳されているものはない。実に、『祈りについて』は四種の英語訳、三種のフランス語訳、二種のドイツ語訳、二種のオランダ語訳の他、イタリア語訳、スペイン語訳、ロシア語訳が出版されており、『殉教の勧め』も三種の英語訳、三種のドイツ語訳、二種のフランス語訳の他、イタリア語訳、オランダ語訳、ロシア語訳が出版されている。[5]

『祈りについて』

『祈りについて』という小品が著述されたのは、本文中に、「あなたがたの要請のままに、祈りによって何一つ得るものはないと考えている人々、またそのため祈ることは余計なことであると思っている人々のもっともらしい〔主張〕を、まず論破せねばならない」[6]とあるように、「アンブロシオスとタティアナ」[7]の二人の懇願によって著述されたものであることは明らかである。

アンブロシオスという名は、オリゲネスの著作にしばしば登場してきており、この小品と同様、オリゲネスの著作の多くは、このアンブロシオスの要請と援助によって著述されている。[8] タティアナについては、ここに登場するのみで、いかなる女性か断定することはできない。現存するオリゲネスの『アフリカヌスへの手紙』の文末で、アンブロシオスの妻は「マルケッラ」という名であることがわかるので、[9] ケッチャウ（P. Koetschau）の言うように、アンブロシオスの妻ではないであろう。しかし、ケッチャウの言うように、アンブロシオスの姉妹でもないとは断定できない。[10] 逆に、P・ノータン（Nautin）は、『殉教の勧め』三七で、アンブロシオスには妻子の他に兄弟姉妹がいたと推定されるところから、タティアナは恐らくアンブロシオスの姉妹であろうと推定している。[11] しかし、これもまた推測の域を出るものではない。いずれにせよ、「いとも慎み深く、いとも健気なタテ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

ィアナ」[12]という言葉から、成熟した女性であり、迫害の時期にも雄々しく信仰に生きた女性と推定される。

ともあれ、このアンブロシオスとタティアナは、「まず第一に、未来のことを神は予じめ知っておられ、必然的にそうなるのであれば、禱りは無駄である。第二に、すべてのことは神の意志に則して生じ、〔神の〕意志されたことはっきりと定められており、〔神の〕意志されることは何一つとして変更されえないとすれば、禱りは無駄である[13]」として「祈ることは意味のないことである[14]」と主張する人々の見解を論駁することを、オリゲネスに要請した。

そのような見解を主張するのは、「万物の上に神を立て、摂理が存在すると主張する人々[15]」であって、決して無神論者でも、摂理を否定する人々でもなかった。そもそも「人格神の信仰なきところにおいては、原則上祈禱は成立しないということが出来る。しかしまたこれとは反対に、たとえ神の実在が信じられている場合においても、神の意志の絶対性が極度に強調せられ、人間の意志の無力が痛切に感じられている場合においては、少なくとも祈願の意を含む祈りは殆んど不可能となる。もし神が一切を定めたもうなら、人間が祈ろうが祈るまいが、物事はその定められたる如くにしか生起しえないとの結論は、有神論の立場からも少くとも考えられる結論である[16]」。これは、有賀の指摘する如く、「宿命論的決定論」の傾向を含む考え方であると言えよう。しかし、「いやしくもキリスト教である限りにおいては、祈禱の全面的否定には決して終り得ない。何故なら、現実の宗教としてのキリスト教は、極めて無邪気に神と人とを父子的関係において見るのであり、両者の間の語らいを当然として前提するのである。すなわち、祈願の意をも含む祈禱を抜きにしては、生ける宗教としてのキリスト教は成立しないのである。それ故、祈禱は必ずしも常に宗教生活の中心であるとはいえないが、少くともキリスト教に関する限り、それは最も大切な、生命的な意味を持つものであるといい得る[17]」。

勿論、本書のすぐ後に著述された『殉教の勧め』からもうかがえるように、アンブロシオス自身は、このような見解に少しの動揺をきたすことのない強い信仰を有していたものと推定される。しかし、「兄弟たちの信仰生

活を護るために」「祈禱否定論を論駁する必要に迫られ」[18]、師と仰ぐオリゲネスに解答を求めたと言えよう。更に進めて考えれば、ヴァレンティノス派のグノーシス主義的キリスト教から、オリゲネスによって[19]、正統信仰に至ったアンブロシオスにしてみれば、この問題は懸案の問題であったとも言えよう。

年代・場所

オリゲネスは、本書二三・4で、「これら〔の点〕については、『創世記』を研究したときに、十二分に論じました」と述べている。そこで問題とされたのは『創世記』の三・八―九の解釈である。すると、当然、『創世記注解』に言及するものと言える。『創世記注解』は、アレクサンドリアで著述に着手され、八巻までがアレクサンドリアで著述され、カイサレイアに移って後、更に四巻が著述されたことが、エウセビオスの記述から明らかである[20]。また、オリゲネスの『ケルソスへの反論』によれば、この十二巻で『創世記』の最初の四章を論じたにすぎない[21]。この注解は断片が現存するにすぎないが、「十二分に論じた」と言い切っていること、及び教会史家ソクラテスの記述[22]から、『創世記』二・二二がこの注解の第九巻で扱われていると推定されることから、『創世記』三・八―九は、この注解の第十巻で扱われたものと推定される[23]。

また、本書三・3では、『出エジプト記』九・三三に言及し、これについては「他の機会に検討する方がよいでしょう」と述べている。このことは、『出エジプト記』の釈義（少くとも当該箇所について）には着手されていないことを示している[24]。

更に、本書十五・1で、「他の〔著作の〕ある所で明らかにしましたように、御子が、存在性（ウシア）と基体の点で、御父とは別のかたであるとすれば……」と述べているが、この問題は『ヨハネによる福音注解』X・37で論じられている。この注解は、五巻までがアレクサンドリアで著述され、六巻以降はカイサレイアで著述されたことは

明らかである。[25] しかし、本書の十五・1が『ヨハネによる福音注解』に言及するものとは断定できない。

更にまた、本書では、現実のものとしての迫害への言及がないので、マキシミヌスの迫害前、即ち二三五年以前の作と考えられる。

従って、以上の点を考慮に入れると、大幅に見て、二三一～二三五年の間の作と言えるが、更にその幅を縮めて、著作年代を限定することは困難である。様々な学者が試みているが、一致するものではない。最近の説をみても、カデュー（Cadiou）は二三二年、[26] アルル（Harl）は二三三年、[27] ウルトン（Oulton）は二三三年または二三四年、[28] ノータンは二三四―五年としている。[29] 尚、我が有賀鉄太郎は、ケッチャウに倣い、二三三―四年としている。[30] いずれにせよ、本書が、カイサレイアへの移住後、二三五年以前に書かれたことは確かである、と言えよう。

内容・構成

本書は既に指摘したように、アンブロシオスとタティアナの懇願に応じて、「祈禱否定論・無用論」を論駁するために著述されたものであるから、それを論駁し、祈りの必要性を説くのは当然であるが、それのみにとどまらず、祈りの意義・種類・方法等を論じると共に、『福音』に記されている「主の祈り」の注解をなしている。その構成は以下のように区分されうる。

序文　一―二・6

第一部　祈りについて　三・1―十七・2

1、「祈り（デエケー）」と「禱り（プロセウケー）」について　三・1―六・2

2、祈りについての反論　五・1―6

3、反論への答　六・1—七・1
4、祈りの効用　八・1—十・1
5、キリストは我々と共に祈られる　十・2
6、天使と聖人らも我々と共に祈る　十一・1—4
7、我々の生活全体が祈りであるべきこと　十二・1—2
8、聞き入れられる祈りの手本　十三・1
9、聖書にみられる聞き入れられる祈りの例　十三・2
10、今日でも、以上で述べた如き祈りは聞き入れられる　十三・3—5
11、何を祈るべきか　十四・1
12、四類の祈り　十四・2—6
㈠願い　十四・3
㈡禱り　十四・4
㈥執り成し　十四・5
㈢感謝　十四・5
13、御父ただおひとりに祈らねばならない　十五・1
14、キリストを通して祈らねばならない　十五・2—十六・1
15、霊的恵みと物質的恵み　十六・2—十七・2
第二部　「主の祈り」　十八・1—三十・3
序　十八・1
「主の祈り」の本文　十八・2—3

祈りの態度　十九・1—二二・2
「主の祈り」の注解　二二・1—三十・3
天におられるわたしたちの父よ　二二・1—二三・5
あなたのみ名が聖なるものとなりますように　二四・1—5
あなたのみ国が来ますように　二五・1—3
あなたの意思が行なわれるように、天におけるように地上でも　二六・1—6
わたしたちの存在のためのパンを、今日、わたしたちにお与えください　二七・1—17
わたしたちの諸々の負い目をおゆるしください　二八・1—10
わたしたちを試みに陥らせず、わたしたちを悪しき者からお救いください　二九・1—三十・3
第三部　補足　三一・1—三四
序　三一・1
祈りのための心構え　三一・2
祈りの姿勢　三一・2—3
祈りの場所　三一・4—7
方角　三二
祈りの主題　三三・1—6
結び　三四

写本

『祈りについて』の写本は、現在、一つあるのみである。現在、ケンブリッジのトリニティ・カレッジの図書館に保存されている。これは十四～五世紀に筆写された写本である。この写本には、前半部に八ヶ所の欠落箇所があるが、これは、この写本の原本となったものに既に欠損があったためと考えられる。この写本は、元はドイツのヴォルムスの司教座聖堂図書館にあったものであるが、そこから略奪されたところを、ボヘミアのエリザベス女王の侍医ルフィウス（Rufius）によって安価で買い取られ、オランダのハーグに運ばれ、ここでまた、当時の著名な学者イサク・ヴォス（Isaac Voss）の手に渡り、スウェーデンに運ばれ、ストックホルムの図書館に委ねられた。ここで、一六五二年に、ダニエル・フィエ（Huet）が、この写本を筆写している。更に、当時、オリゲネスの全著作の校訂版出版を企画していた[31]ソーンダイク（H. Thorndike）の手に、イサク・ヴォスはこの写本を委ねることになる。こうして、ソーンダイクの手で、イギリスに渡り、トリニティ・カレッジの図書館に落ち着くことになった。

『殉教の勧め』

紀元六四年の皇帝ネロから、三一三年のコンスタンティヌス帝のキリスト教公認までの間、教会は断続的に発生し、様々な規模で加えられた迫害に耐え続けてきた。

オリゲネスは、その六十余年の生涯の間、三度迫害に遭遇している。

第一回目は、二〇二年にセプティミウス・セウェルス帝の発布した、キリスト教徒に改宗勧告活動を禁止する

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.